

鶴見川流域におけるネットワークング活動

鶴見川流域ネットワークング 世話人 大澤 浩一

はじめに

このたび第1回「日本水大賞」において私たち鶴見川流域ネットワークング(以下TRネット)の活動が建設大臣賞をいただきましたことを、この誌面をお借りして、まず、関係者の方々に心からお礼申し上げます次第です。1991年発足以来続けてきた、流域を視野におき行政等とのパートナーシップによる安全、安らぎ、環境重視の持ち場を持った市民活動のネットワークが、このような評価を受けたことは、TRネット一同大変うれしく思っております。ここで、近年の私たちの活動とそれを支えているしくみについてご紹介させていただきます。

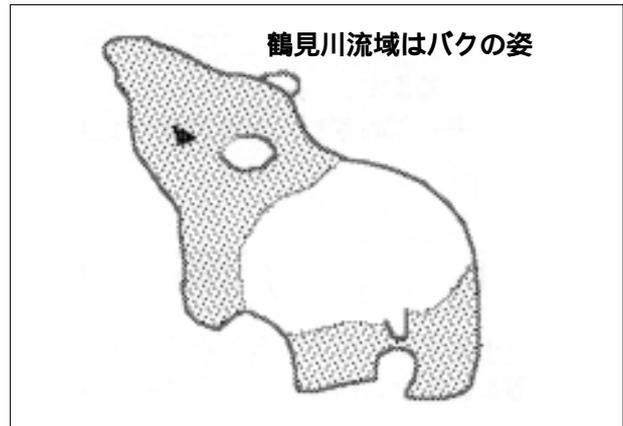
TRネットの活動スタイル

鶴見川の概要及びTRネットの成り立ちや活動の概要については、1997年7月号の「河川」に掲載されていますので、重複はできるだけ避けたいと思います。TRネットの活動は言ってみれば鶴見川流域で持続可能な未来をめざす地球市民、「鶴見川流域人」の流域連携活動です。私たちが基本においている活動のスタイルは、次の5つに要約されます。

バクの姿の流域地図を共有し行政区画を越えて活動します。

川に沿って自然と都市と文化の再発見・再学習をすすめます。自ら歩き、足もとから川へ、川から水系へ、水系から流域へ、自然と都市と文化の再発見・再学習をすすめます。

安全・安らぎ・環境重視の理念のもとで、川を保全・再生し、自然と都市が共生する流域文化・流域暮らしを創造します。川を守り、環境の保全・回復を工夫して、水と緑と文化のネットワークを育て、安全・安らぎ・自然の賑わいを大切にするエコロジカルな流域文



鶴見川流域図：流域面積235km²、本川延長24.5km²、流域人口約170万人

化を創造します。

多彩なパートナーシップを工夫します。それぞれの持ち場・役割分担と、相互の連携を大切にし、市民・企業・行政間にたくさんのパートナーシップを育てます。

持続可能な未来をめざし、流域視野で交流します。

サブネットの取り組みにおける地域連携

今年で9年目を迎え拡大しているTRネットの活動に対応し、また、河川法の改正に伴い地元自治体等とのきめ細かな連携を推進するため

に、1997年からTRネットの中に、上・中・下流、支川流域にサブネット体制を推進しています。すでに5つの地域別サブネットが活動しており、その一端をご紹介します。

源流泉の広場における福祉対応 鶴見川源流ネットワーク

鶴見川源流ネットワークは、東京都区間を対象とし、都、町田市との連携を図るため、源・上流で活動している4団体で活動しています。源流ネットワークと関係行政機関で構成される鶴見川情報交換会等を通じて、流域の重要な拠点である源流泉の広場や、東京都小山田緑地の池などでの生き物の管理を行いながら、上流部の河川改修や源流域の自然環境保全に関する市民提案を行っています。とりわけ、源流泉の広場においては、誰もがここを訪れ、源流の自然に触れあえるように、源流ネットワークの要望で、車椅子や福祉車両で訪れることができるよう、スロープの園路、駐車スペースがこの春整備されました。こうした実績を踏まえて、さらにこの広場の拡充も提案しています。

神奈川県との現地視察と情報交換及び河川敷の植生管理 鶴見川中流域ネットワーク

神奈川県区間を対象とし、県、横浜市青葉区・緑区・都筑区・港北区との連携を図るために発足したのが、鶴見川中流域ネットワーク（以下中流域ネット）です。中流域ネットは、河川管理者である神奈川県横浜治水事務所及び各区のまちづくり担当者と、中流域の川づくりや河川管理に関する情報交換を行うために、中流域懇話会を設置しています。この懇話会では、これまでに本川神奈川県区間、支川早淵川と一緒に視察し、現況確認と情報の共有化を図ると



写真1 源流ネットワークによる源流泉の広場の環境管理作業風景



写真2 中流域懇話会の河川視察風景（落合橋下流）

ともに、中流域ネットとしての本川区間の提案をとりまとめています。また横浜治水事務所と連携し、鉄町地先の河川敷の野草管理作業を定期的に行ったり、横浜市緑政局との連携で、佐江戸地先の河川敷の自然観察会と生物調査を行っています。こうした川の自然環境管理作業を通じて、地域への河川環境保全の普及に努めています。

地域住民団体、福祉団体との共同の取り組み・提案 カワウネットワーク

横浜市港北区間を対象として京浜工事事務所、

鶴見川流域におけるネットワーキング活動

鶴見川流域ネットワーキング 世話人 大澤 浩一



写真3 川と福祉のワークショップによる障害者グループとの合同河川視察（新横浜鳥山川合流点付近）

横浜市港北区との連携を図るために発足したのがカワウネット（鶴見川下流ネットワーク港北）です。新横浜の多目的遊水地を初め、港北区区間の沿川地域を含めて、川からのまちづくりプランをまとめるとともに、川と福祉のワークショップ（後掲の身近な河川環境調査プロジェクト参照）を開催し、地域住民団体や福祉グループと合同で綱島から新横浜間を車椅子で調査し、地域懇談会を行い合意を得ながら市民提案をまとめつつあります。そして、関係行政機関へ提案を行い、通称バリケン島（水鳥の生息する中州）の保全など、維持管理も含め、実現に向けて調整が始まっています。

まちづくり市民団体と連携した水辺の拠点整備への取り組み・提案 下流ネット鶴見

下流・河口域の鶴見区区間を対象として、京浜工事事務所、鶴見区との連携を図るために発足したのが鶴見川下流ネットワーク鶴見（以下、下流ネット・鶴見）です。下流ネット・鶴見では、鶴見川橋の架け替えに伴う、橋詰め整備のワークショップにおいて、橋の歴史案内板の設置を実現させた実績から、鶴見区いかだフェス



写真4 下流ネット・鶴見による鶴見川下流域の提案をまとめている会議風景

ティバルの会場である佃野公園の防災拠点再整備にあたって、鶴見川に関する歴史資料館、水族館、活動拠点等の複合的な機能を持つ拠点の整備と、市民による運営を下流懇話会等を通じて関係行政機関へ提案しています。また、生麦地区の堤防整備にあたっては、現状の河口干潟の保全・回復・創出を提案しています。今後、観察会や勉強会を重ね、地域住民にも呼びかけ意見交換を行い、実現に向けて地域合意をつくっていかうとしています。

この他、鶴見川の支流、矢上川では、昨年矢上川流域ネットワークが設立され、矢上川の最源流部の開発に伴い、犬蔵谷戸を活かした自然公園整備の提案を始め各所の提案をとりまとめています。今後、他の支川流域でのサブネットの発足とその取り組みが期待されます。

地域の取り組みを流域につなぐ新たな活動
こうしたサブネットを中心とした活動とともに、社会情勢に対応した新たなプロジェクトにも取り組み始めています（鶴見川・いき・いき・セミナー、鶴見川流域クリーンアップ作戦等については1997年7月号を参照）。

パートナーシップによる流域保全・整備の総合戦略「鶴見川流域キャンペーン」

平成7年度より鶴見川流域全体を対象とし「安全・安らぎ・自然環境重視の川づくり・まちづくりを通じて、持続可能な未来を開く新しい流域文化を築く」ことを目的に、行政・企業・市民がパートナーシップを組んで、様々な環境保全活動、流域連携の諸活動を推進するための継続的なキャンペーンとして、「鶴見川流域キャンペーン」を進めています。この取り組みにヒントを与えてくれたのが、平成9年2月に行ったTRネット主催の「英国マージー川流域交流フォーラム」で紹介された、マージー川流域キャンペーンです。これは、1985年から25年間に40億ポンドを投じ、中央・地方政府、EC、民間企業、ボランティアの結集によって、経済発展優先のために犠牲にしてきたマージー川流域の環境を、産業革命の荒廃から回復させ、最終的に流域を、住む、働く、憩うためのより魅力的な地域とすることを目指した流域活動です。

現在、TRネットが取り組む様々な活動や行政との共同プロジェクト、さらにこのキャンペーンの趣旨に賛同していただける行政関連事業等をつないで、長期的な流域キャンペーンにして行こうと関係方面に働きかけています。

子どもの川体験を豊かにする環境学習プロジェクト

流域の小中学校の子どもたちの川での体験を通じて、環境学習や総合学習を推進しようと、環境学習プロジェクトを始めています。すでにいくつかの小中学校では、TRネットメンバーが講師として呼ばれ、先生方と一緒に川での水質や生き物調査、クリーンアップなどの体験学習



写真5 「ふれあって鶴見川'98」のイベントの一環として流域の小中学校の子どもたちが作成したマップをつないだ「流域バクオブジェ」

を実施しています。また横浜市河川部の呼びかけで始まった支川梅田川での「水辺の楽校プロジェクト」では、梅田川・水辺の楽校協議会が流域の学校、PTA、自治体、水利組合、市民団体等で発足しており、TRネットメンバー、梅田川を楽しむ会及び事務局が参加して、子どもたちが梅田川を使った環境学習や川遊び等を通じて、川とのかかわりを取り戻すお手伝いを始めています。

この環境学習プロジェクトは、こうした個々の取り組みをつなぎ合わせ、子どもたちを核に、鶴見川流域全体での「川に学ぶ」しくみをつくりたいとするものです。

川の福祉を現場で考える、身近な環境調査プロジェクト

平成9年に「福祉の川づくり研究会」からの要請を受けて、鶴見川流域で川の「身近な自然環境」と「川への近づきやすさ」について、TRネット、地域の福祉団体、自治体関係者、河川管理者と一緒に川の点検調査を行いながら、川の福祉を考えるプロジェクトが始まっています。

鶴見川流域におけるネットワーク活動

鶴見川流域ネットワーク 世話人 大澤 浩一



写真6 改良されたスロープを車椅子のグループと点検作業（鶴見川橋下流）

これまで、下流の鶴見区では、身障者グループや福祉グループとともに、車椅子等で川沿いを歩き意見交換を行っています。これを基にできるところからスロープや手摺等を整備し、少しでも身障者の方々が鶴見川に触れられるように、試験的に改善が行われています。また港北区では、福祉グループや関係行政担当者の方々とともに車椅子で同様の点検を行い、意見交換や懇談会を通じて市民提案をまとめつつあります。今後、こうした各サブネットの取り組みを踏まえながら、流域全体で福祉の視点も取り入れた市民提案をとりまとめる予定です。

生物多様性保全モデル地域計画（鶴見川流域）
に沿った生物多様性プロジェクト
平成7年10月に発表された生物多様性国家戦略

に沿い、平成9年度に鶴見川流域をモデルにして、流域のランドスケープの視点で、水系を軸に生物多様性を総合的に回復するための「生物多様性保全モデル地域計画（鶴見川流域）」が環境庁でつくられました。そしてTRネット等市民団体と、事業者、研究者、関係行政とのパートナーシップで、この計画のフォローアップ事業を行うことになり、平成11年度は横浜市が中心となり池の生物多様性保全・回復にかかわる流域フォーラムが開催される予定です。TRネットは、このフォローアップ事業を推進するために生物多様性プロジェクトを立ち上げています。

新たな川づくりを目指す市民の水辺環境管理プロジェクト

先に示したように、源流ネットワークでは、源流泉の広場の、維持管理作業を町田市からの委託で、また、中流域ネットワークは鉄町地先の河川敷の植生管理を、県横浜治水事務所と合同で定期的に行っています。さらに新横浜の多目的遊水地では、将来整備される公園の自然環境再生エリア等での湿地回復の実験として、TRネットの中にプレウエットランド実行委員会をつくり、関係行政の協力で試験的に池を掘り、水生生物の回復状況の観察を行っています。

こうした各地域で取り組んでいる市民による水辺の様々なプロジェクトは、今後継続していくことで河川環境の情報収集につながるとともに、これらを広くPRし、関心のある市民にも参加してもらうことで、普及啓発につながっていくと思われます。そして、流域を視野におきながら、それぞれの地域で市民による取り組みを積み重ねていくことによって、今後求められるパートナーシップによる新たな河川管理 = <

いい川づくりが実現されてくるでしょう。いわばこのような市民活動が新たに河川管理の枠組みを広げ、その中に「いい川」づくりにおける市民の役割を生み出していくことになると考えます。

この他に、NPO法人化プロジェクト、流域基金プロジェクトが検討されていますが、誌面の関係で別の機会に譲りたいと思います。

活動を支えるしくみ

このようにTRネットは、個々の団体で、各サブネット、流域全体で、様々なレベルで活動を重層的に展開しています。その基本は持ち場を持つ市民団体及びプロジェクト集団が、ビジョンと人、情報の交流を進めながら緩やかに連携するネットワーク活動です。中心的に活動している団体やプロジェクトの代表者で構成された世話人会議（20名ほど）はTRネット全体に関わる重要事項や活動方針の作成、プロジェクトの企画・承認・運営などネットワークの中心的な作業を担当し、年1回の流域総会で年間の活動方針を決定します。また、世話人会議の運営執行面での世話役としてワーキンググループを置いています。この世話人会議とネットワーク活動全体にかかわる出版・企画・調整・運営等の役割を引き受けているのが事務局です。ネットワーク活動の調整機能の強化と同時に川・流域に関わる公共的な業務を責任を持って実行していくために、1997年春に世話人による法人組織「(有)流域法人・バクハウス」を設立し、ここで専従スタッフ3人が事務局を担っています。

こうした拡大するTRネットの活動を円滑にし、地元自治体や地域社会とのきめ細かな連携を図るために、先に紹介したサブネットが重要

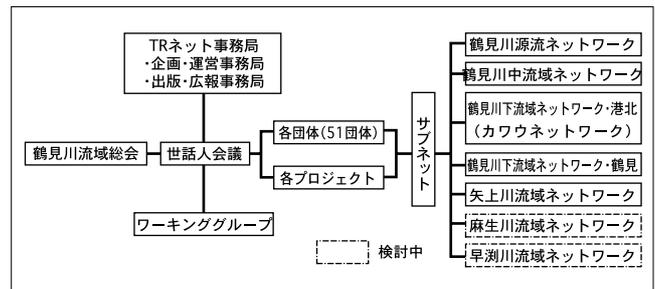


図3 鶴見流域ネットワークのしくみ

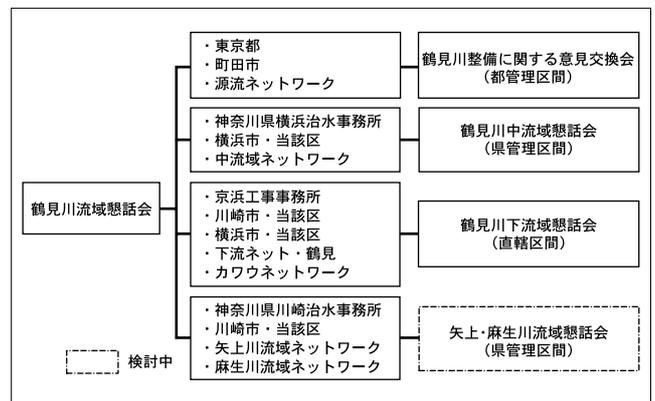


図4 TRネットと流域行政との情報交換の場である鶴見川流域懇話会等

な役割を担っており、地域の行政機関や地域住民団体、他の市民団体と具体的なテーマで連携し成果をあげつつあります。

また、これまで流域全体で取り組んできた鶴見川流域クリーンアップ作戦においては、昨年度からサブネット単位の調整・運営に切り替えました。その結果、地域の行政や企業へのきめ細やかな対応ができ、実行委員会での調整や運営にかかる時間の短縮などの、より効率的・効果的な運営が可能となってきています。一方サブネットを流域全体につなぎ合わせている要が、世話人会議と事務局です。従って、その運営と維持が重要であり、大きな課題となっています。

このようにサブネットは、個々の活動を通じて地域と行政対応の必要性から、地域ごとに工

鶴見川流域におけるネットワーキング活動

鶴見川流域ネットワーキング 世話人 大澤 浩一

夫され生み出されたしくみです。いわば、ボトムアップ型のサブシステムです。ですから、各団体の持ち場での活動を、サブネットを核に流域全体のしくみにまとめあげていくことが増せば増すほど、流域思考のビジョンは、持続可能な流域の姿を具体のかたちに見えてくることでしょう。

このたびの受賞によって、TRネットの流域全体をつなぐ活動に加え、個々の市民活動を基本におき、サブネットを核に調整を行い、それらを流域全体へつなぎ合わせていくしくみ、いわば「鶴見川方式」のシステムが、今後の全国の流域活動にとって、一つのモデルとなるという評価をいただいたと思いを強くしました。これを機会に、持続可能な流域協働社会が実現する日をめざして、ますます鶴見川方式に磨きをかけ、<いい川>づくりに取り組んでいきたいと考えます。